

平成 17 年 6 月 17 日

大久保 啓次郎

「時事新報論集」に於ける福澤論説の真贋について

★ 岩波書店刊の「福澤諭吉全集」(全 21 巻)に、福澤以外の記者が書いたと見られる論説が少なからず収録されている、と指摘する本が平成 16 年に出版された。

本のタイトルは「福澤諭吉の真実」(文春新書)である。著者は静岡県立大助手で、慶応義塾福澤研究センター客員所員の平山 洋氏。専攻は日本思想史である。

問題の論説の中には、「福澤が中国侵略を肯定した」という主張の根拠とされてきたものもあり、今後の福澤研究に影響を与えるのは、必至と思われる。

福澤諭吉全集・現行版は 1958～64 年に刊行され、全集の 8～16 巻(全 9 巻)には福澤が興した新聞「時事新報」の論説約 1,500 編が収められている。大部分が無署名であるが、約 1,500 編はすべて、福澤自身が書いたか、自らアイデアを出すか、他の記者が書いたものを添削するなど、福澤が関与したもの、と見られていた。

しかし、平成 13 年、井田進也・大妻女子大教授(比較文化論)が「歴史とテキスト」(光芒社)で、漢語や送り仮名などから、福澤以外の記者による論説が全集に含まれている可能性を指摘した。それを踏まえて平山氏は独自に調査を進め、1,500 編のうち約 700 編は、福澤が全く関与していないか、関与の度合いが極めて低いと判断している。

日清戦争や朝鮮問題に関する 1894(明治 27 年)、95 年(明治 28 年)の論説・下記 10 編のうち 7 編(×)については、福澤が執筆していないと平山氏は見るとする。

×「支那政府の長州征伐」(94・7・22) 石河執筆(伝記に明記)

×「大いに軍費を抛出せん」(7・29) 石河執筆(平山判定)

×「軍資の義捐を祈る」(8・14) 石河執筆(井田判定)

「私金義捐に就て」(8・14) 福澤執筆(署名入り)

×「日本臣民の覚悟」(8・28, 29) 石河執筆(井田判定)

×「外戦始末論」(95・2・1～7) 石河執筆(平山判定)

×「凶漢小山六之助」(3・26) 石河執筆(平山判定)

「私の小義侠に酔ふて公の大事を誤る勿れ」(3・28) 福澤執筆

「唯堪忍す可し」(6・1) 福澤執筆 岡部喜作宛書簡(95・6・1)で証明

×「朝鮮問題」(・) 石河執筆(平山判定)

これら以外にも、清国や朝鮮に関する論説で下記 2 編(×)は福澤が執筆していない、他 1 編(?)は福澤が執筆しているが、波多野の原稿の清書か?と平山氏は見るとする。

? 「東洋の政略果たして如何せん」(明治 15 年 12 月 7 日)

× 「大英断を要す」(明治 25 年 7 月 19 日)

× 「日清戦争は文野の戦争なり」(明治 27 年 7 月 29 日)

又、福澤が脳卒中で倒れた 1898 年 9 月以降の 72 編と 1901 年 2 月の死去後に掲載された 6 編も全集に収められているが、福澤が関与していない事は明白である。(平山氏) この 72 編の中には、清国の兵士を豚になぞらえる論説(1900 年 6 月)などの主張も展開されている。これら 78 編についての筆者は、いずれも弟子の石河幹明(1859~1943)である、と平山氏は言う。

石河幹明は、時事新報社で主筆などを経て退社した後、福澤全集編纂と福澤伝記執筆に石河一人で当たった。現行の全集は石河版を基にしている。

平山氏は「石河が全集を編纂した 1920~30 年代は大陸進出論が高まっていた。福澤をその思想の先駆者とするために、全集に入れる論説を取捨選択し、石河自身の論説も加えたのではないか」と語る。

尚、福澤諭吉と石河幹明との関係については、参考までに、伊藤之雄・京都大学教授の {「福澤諭吉の真実」の迫力} を添付致しましたので、ご参照下さい。

★福澤諭吉は、「市民的自由主義者」か、「侵略的絶対主義者」か、などと様々に論じられてきた。そこに、「福澤諭吉の真実」が登場して、「清国や朝鮮に対する激しい論説の殆どは、福澤以外の人(主として石河幹明)が書いたものである」と平山氏は明言する。

しかし、仮に「福澤諭吉の真実」は的を射ているとしても、その事実だけでは、「福澤は侵略的絶対主義者ではなかった」事の証明にはならないと思う。(必要条件) 「福澤諭吉と日清戦争」の問題を解明して、はじめて「福澤は市民的自由主義者であった」と、言えるのではないだろうか。なぜなら福澤は、時事新報論説の如何に拘らず、日清戦争推進の肯定論者であった事は事実である。したがって、日清戦争に関する福澤真筆の論説と一緒に、日清戦争前後の書簡の分析・解明を行い、福澤が日清戦争をどのように捉えていたか、「朝鮮の独立のため」は真実か、を明白にする事が重要と考える。

★「福澤諭吉の真実」に対する書評は、朝日新聞を筆頭に、毎日、産経、エコノミスト、日経、文芸春秋、諸君、アエラ、ヴォイス、ウエッジ、聖教・・・などすべて好評である。その中で、毎日新聞の「ウイークリー文化 批評と表現」に下記のような批評があった。

「膨大な資料を基に、分析した平山氏の主張には、確かに説得力がある。しかし疑念は残る。時事新報は福澤が自ら興した新聞である。そこに自説と全く相容れないものを載せるだろうか? 1898 年 9 月、脳卒中で倒れた後の福澤は、他人の論説に目を通す事が出来なかったかもしれない。だが倒れる前にも、たとえば当時植民地となった台湾で蜂起した現地の人々を「せん滅」すべきだとした論説(1896 年 1 月)もある。石河の論説を掲載させた以上、福澤にも彼の思想に共鳴するところがあったのではないか?」

◎私は、福澤が石河の思想に共鳴するところがあったとは思わないが、時事新報の最高責任者という立場から、(脳卒中で倒れた後は別としても)日清戦争前後の他人の論説に目を通さなかったなど、信じ難い事である、と思っている。

★ 平山氏は「今後全集から自筆以外の論説を削除するというのではなく、福澤真筆、福澤立案記者起稿、記者立案福澤添削、記者執筆・・・とカテゴリーを明記する」事で、全集（福澤諭吉像）8巻～16巻（「時事新報論集」の部分）の改訂を呼びかけている。

これに対して慶應義塾福澤研究センターの小室正紀所長は、「時事新報」論説の執筆者が誰であったかを推定する事に、意味があるか否か、疑問に思っている。

なぜなら、「時事新報」はやはり何と言っても、福澤をデスクとする編集部であり、そのグループの思想と考えるべきだと思うからである。

（しかし後述するように、小室所長も、新しい「全集」編纂の必要性を呼びかけている。）

◎ 私は、福澤は「時事新報」の編集責任者であり、たとえ福澤が関与していない論説があるにしろ、福澤にも責任の一端がある、と認めつつも、「福澤諭吉全集」として後世に残すなら、福澤諭吉の名誉の為にも、（平山氏が主張するように）福澤の関与の度合いによりカテゴリーを明記して、現行の「福澤諭吉全集」を改訂すべきだと思う。それは一大事業かもしれないが、「福澤諭吉研究者」に託された使命であると考えている。

★ それにも拘らず、現行の「福澤諭吉全集」（21巻）の改訂作業は、容易には行われないだろう、と思われる幾つかの背景がある。

この問題解決に取り組める組織は、現在では、福澤研究センターか、福澤諭吉協会であると考えられる。

福澤研究センターは、元々、塾史資料室を全面的に改組して発足した研究所である。「しかし、センターは単なる塾史の資料室ではない。同時に、福澤諭吉や慶應義塾を視野におきつつ、日本の近代化について研究することも目的としている。・・・又センターにとって、福澤諭吉研究の世界の中心としての役割を果たす事は、言うまでもなく重要な課題である。・・・現在考えなければならない課題の一つは、新たな「福澤諭吉全集」の編纂だろう。・・・21世紀の今日には、又別の「福澤諭吉全集」を編纂し得るし、又しなければならない。センターではこのための研究や準備も進めなければならないだろう。」と、小室所長は「福澤研究センター通信」創刊（2004・9・30）に際して、抱負を述べている。「福澤諭吉の真実」は、すでに2004年8月20日に初版が発行されていたから、おそらく、福澤論説の真贋による「全集改訂」を意識した発言と思われる。

しかし、小室所長の抱負とは別に、慶應義塾は2008年に創立150年となる。センターでは、この時期の記念として、「慶應義塾150年史資料集」全20巻の刊行を開始する事を決めており、現在その準備に大忙しであり、当面は、全集の改訂作業を行う余裕など、全くないのではないかと？

それでは、福澤諭吉協会が、この問題に取り組むのが、相応しいのか？既に「福澤諭吉書簡集」（全9巻）の編纂作業（慶應義塾から委託された事業）も終了し、福澤諭吉研究者の集団にとり、新しい「福澤諭吉全集」編纂というテーマは、遣り

甲斐のある、歴史に残る作業のように思えるのだが……。しかし、福澤諭吉協会にも、「全集」の改訂作業に、容易に取り組めない複雑な事情がある、と思われる。

[福澤諭吉協会の前身は「社団法人福澤諭吉著作編纂会」(理事長：小泉信三、理事：富田正文 他)であった。この会は1951(昭和26)年設立以来、福澤諭吉の全著作の編纂校訂に従事し、完了後はその編纂著作権をすべて慶應義塾に寄付し、義塾はこれを受けてその創立100年(1958年)の記念行事として「福澤諭吉全集」全21巻(のちに再版の時、別巻1冊追加)を刊行した。初版刊行完了は1964(昭和39)年であった。

福澤諭吉著作編纂会はその使命を完了した後、これを改組して名称を改め、福澤研究者の連絡交流の場として広く会員を募り、「社団法人福澤諭吉協会」として1973(昭和48)年に発足し、今日に至っている。初代理事長は、高橋誠一郎、のちに、富田正文も理事長に就任している。

当協会は、福澤諭吉研究の方々、福澤に関心を持つ多くの方々の、連絡機関、集会の場、発表の場として運営されている。目的は福澤諭吉研究の推進である。]

したがって、「全集」改訂の仕事は、形式的には、慶應義塾福澤研究センターになる。

しかし、福澤諭吉協会が、「全集」の改訂に、積極的に取り組めない、もっと大きな理由があるように思える。

現行版「福澤全集」は、富田正文と(彼の弟子である)土橋俊一により編纂された。現行版「全集」は、1925年・石河編纂の大正版「福澤全集」と1933年・石河編纂の昭和版「続福澤全集」を併せた上、さらにその後に発見された論説や書簡を収録したものである。しかも、昭和版「続福澤全集」の編纂には、富田正文が石河幹明の助手を務めていた。

富田正文は、当時慶應義塾大学の学生であった頃、石河幹明の「福澤諭吉伝」編纂を、編纂所開設の当日から完成の最後の日まで手伝っており、その時以来、石河幹明を師と仰ぎ尊敬していた。

上記のように、現行版「全集」は福澤諭吉協会の前身の組織が編纂した。そしてその中心人物であった富田正文は、編纂会の理事であり、協会の理事長にもなっている。その上、富田正文は、現行版「全集」が完成するや、日本学士院賞を受賞したのである。

★ 最後に、慶應義塾のOBが福澤論説の真贋をどのように見ているか、一例を紹介。

元・岩波書店編集部長で、福澤諭吉協会編集委員の竹田行之氏(理事も経験)は、平成17年1月28日に交詢社で行われた、交詢社創立125周年記念講演会で、「ジャーナリスト福澤諭吉」を語り、無署名論説の取り扱いについては、石河幹明と富田正文の功績を絶賛し、平山氏の「全集」改訂(くさいもの)には蓋をして、一笑に付した。

「福澤諭吉の真実」は、義塾の外部では好評であるが、義塾の内部では不評のようだ。

◎ [学問のすすめ15編]に「信の世界に偽詐多く、疑の世界に真理多し。事物を疑って取捨を断ずる事。」とある。平山氏の「全集」改訂に、耳を傾けるべきである。